佐賀電信錄

リ 5
6376
2上

門り5
號6376
卷 2

早稲田大學圖書館
昭和25.3.1
購入

齊藤書屋藏書之記

佐賀電信録下之巻

横濱　神奈垣魯文編輯

第五回

賊徒潰敗開城を議す
併征討總督の宮佐賀ふ發す

夫那破侖の佛國ふ王たるや英邁世を蓋ひ材力凡を拔て國威を地球上ふ輝ゝ兵力を五大洲ふ振ふを以て名正しゝらずと雖も創業三世ふ傳へ日今共和の國体と變ずるも其黨怒筆として猶其偉勲を慕ふ者尠らず豈反黨の巨魁と等類うらん

や一度偽帝の名を下せども當時歐洲の文明皆此人の成功ふ出るを以て更ふ開化の先導と稱せ亦過たりと云可うらぞ曾て江湖の生才輕々進歩躰ら許て量度を過るが故ふ後年の失錯前功を消込ふ江藤嶋両氏の如き勤王乃復大ひふ義氣を奮發し維新一統の方今一ハ上等四位ふ叙し官職參議大臣ふ列し一ハ中等四位ふ從し賞典生前を凌く至重至大の朝恩を顧ず義勢ふ托し自己の不平を愈さんの淺慮之を憂國と云うん乎之を至愚と

唱せんの論者宜く衆評を凝せよ閑話休題佐賀の賊兵官軍日を追て進擊し之が爲ふ屢敗績ふるを以て迎戦の勢ひふく橋ふ除き出兵を引退らせ城中の異論或ハ籠城ふ主張し或ハ恭順降伏を議する者ありて紛紜隔意を生じ密ふ脱走する者數らずと聞へられハ廿六日ふハ東軍進んで神崎の賊ふ擊ち臺兵之ふ應援し翌廿七日ふハ総軍を三道ふ分ち境原驛ふ進擊する賊軍必死ふ決せ者此所ふ對陣して終日の戦争殊ふ烈しく彈丸箱

伏拂へバ抜刀電光の如く死者狂ひ叫奮激突戰其矛頭當る可からず或ハ長鎗の人ふ觸るゝ楊枝飛燕乃休をなし接して彈丸ふ斃るゝあと對ひて刀下の鬼とあらゝ義ふ進み勇ふ走り臆して退くゝれで追擊度ふ過るあり故ふ父擊る兵共回顧る間暇ふく兄倒るれ共救助るの餘地なし此時賊を討取こと無數ふして官軍も又死傷ゝ然れ共猶進んで蓮池の賊を追ひ將ふ佐賀ふ逼らんとする金烏西ふ傾き既ふ薄暮玉兎の飛搖まる伏看る

が爲ふ止まりて各隊野營を布き銃器伏組み夜襲の防禦嚴格ふして巍々整々と備へたる手時政府より佐賀及び接近乃諸縣へ如此布告ゝ

嶋根縣（出雲 一圓）濱田縣（石見 一圓）小田縣（備中 備後）廣嶋縣（安藝 備後）山口縣（長門 周防）名東縣（阿淡 讃岐）愛媛縣（伊豫 一圓）高知縣（土佐 一圓）長崎縣（肥前 壹對）福岡縣（筑前 一圓）三潴縣（筑後 一圓）小倉縣（豊前 一圓）大分縣（豊後 一圓）佐賀縣（肥前 九郡）白川縣（肥後 一圓）宮崎縣（日向 一圓）鹿兒嶋縣（大隅 薩摩）

今般詮議の爲有之其縣於て陸海軍省及鎮臺の

用向を除の外平常免許者たり共銃砲弾藥類賣買運送共當分の内嚴禁候條此旨至急可相達事

明治七年二月

夫内外雜居の紛紜たるや政府我彼相共ニ交際親睦一約各國公法ニ出るも各民の間ニ於る又然らざるの憂情を釀さゝ近世米國南北両部分裂一て爭鬪交戰の折英國ハ南部ニ軍艦ヲ販賣せ一以て両部一和の後英米両國の間ニ爭論起り既ニて兵端ヲ開んとせ一を魯國之を扱ひ稍く

ニ和議成り英より米ニ謝する償金ヲ以てせり是他ニあらず奸商同氣相求るの弊ニて國害是より大ひなるハなし一と せん目今佐賀動揺の際長崎ニ在留の外國人密ニ夥多の「カードリッチ」乃ち早合せの彈藥ヲ賊軍ニ販賣せ一ちと顯然たるよ

政府之ヲ若干没入せらる一ゆゑ

因て曰前ニ長崎港内外佐賀の擾亂ニ賊徒縣廳を襲ひ權令（岩村高俊）の率る臺兵敗散せ一を聞き人心大ひニ動揺せ一らゞ廿日午後三時當縣令（宮川

房之より外國（コンシュル）則ち領事官ハ布告して
當地ハ害事なきを示せしハ同日午後十時
ハ及び再告して叛徒既ハ逼らんとするの急報
あり故ハ市街洶々或ハ其資産を外國人の倉庫
ハ輸入して安全を託せ者あり此時外國（コンシ
ュル）及び港内ハ投錨せし外國軍艦魯西亜二艘
英米共ハ各々一艘の將校等直ハ會議して寄留
外國人の保護防禦をかさんと計策を盡せり然
るハ間諜の賊徒等深堀其他ハ於て忽地捕縛せ

らるるハ港中の内外人等全く無事を得る
ハ至る

此時朝廷陸軍少將山田野津の両氏及び佐賀權
令岩村高俊其他士官兵隊へ慰勞として酒肴を賜
ふ

士官兵隊

佐賀縣賊徒為鎮静出張被仰附候處賊徒益ゝ暴
を逞し候ハ付臨機の處分ハ及び格別盡力の段
歟感被為在候依之為慰勞酒肴下賜候猶此上奮

勵速ヵ平定の功績可奏肯御沙汰候事

陸軍少將山田顯義
陸軍少將野津鎮雄

各通

佐賀縣賊徒益凶暴を逞し遂ヵ官兵ヵ抗し候ヵ
有進討力戰ヵ及候段
嚴慮被為在候依之為慰
勞酒肴下賜候猶此上奮勵兵士を率ひ勵み速
ヵ平定の功を可奏肯御沙汰候事

佐賀縣權令岩村高俊

佐賀縣賊徒肅集の報を聞き速ヵ赴任暴焔を避

ろず說諭ヵ及ひ候所却て彼の襲擊ヵ逢ひ困難
ヵ罹り候段苦勞ヵ被思召依之為慰勞酒肴下賜
候事

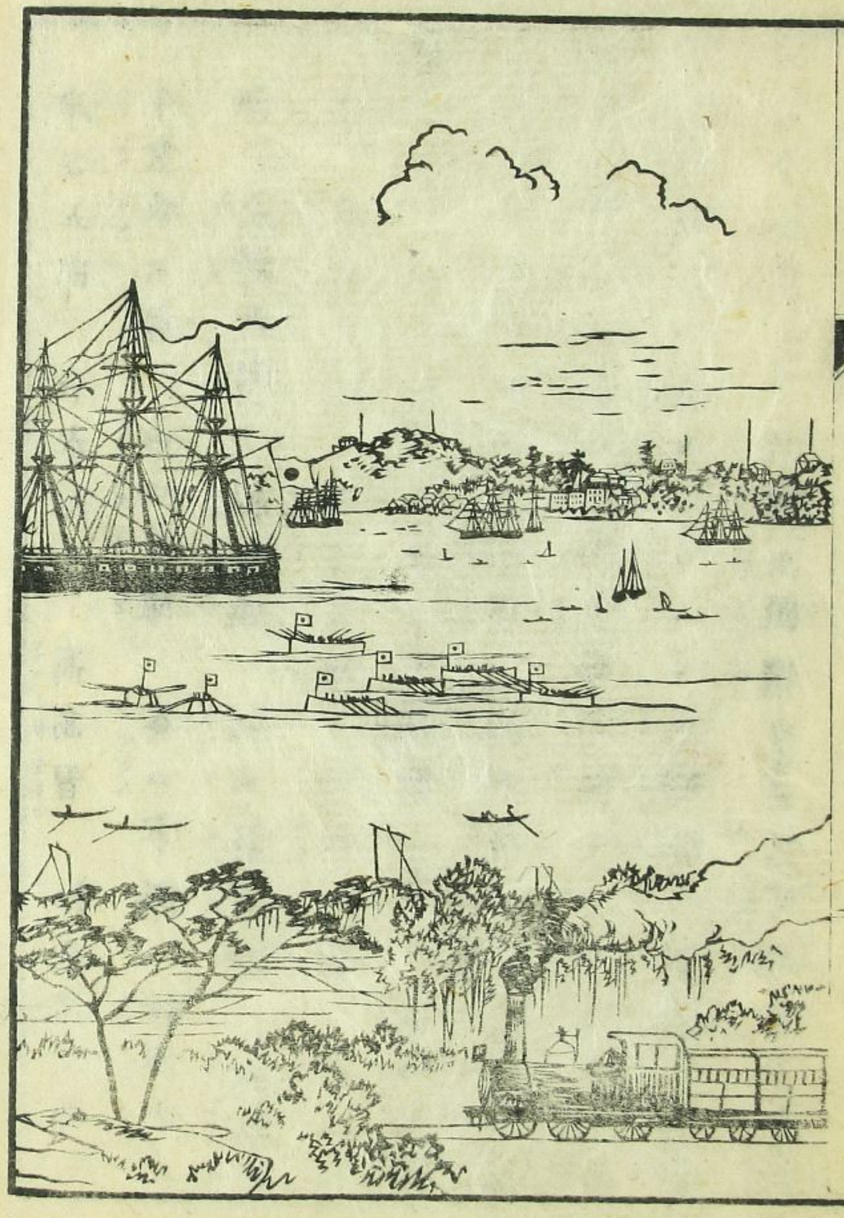
同二十八日官軍野營を拂て蓮池ヵ陣城居へ境町
佐賀江一里半すぐ進擊せるヵ此日の戰ひ殊ヵ烈く早朝
久保山嶺を攻むるヵ賊兵山ヵ倚り臺場を構へ眼
下代目途ヵ打發つ大小銃砲雨の如く面を仰可き
透もあらず祢ど官軍毫も臆せる色なく布陣揉頭て
揶ヵ代へ斃るゝ味方を乘越へ踏越へ辛くして半

途ニ至リ號令違ハズ隊伍代列シ大砲隊ヨリ連發の「カノン」の目的圖ニ叶ヒ賊隊亂れ彈丸の破烈ニ死傷夥敷く殘兵何ぞハ堪可ん皆散々ニ逃去官兵臺場を乘取りて猶も進んで山上の敵城ニ登るより此手の隊長久留嶋某銃丸ニ當り即死するより兵士散亂して遂ニ山林ニ火を放ち陣營悉く灰燼となせり此日午前四時井田陸軍少將廣島鎮臺兵三中隊を率ひて本營ニ着陣ト同十二時三瀬越ニ出張せり然るニ味方昨夜よりの

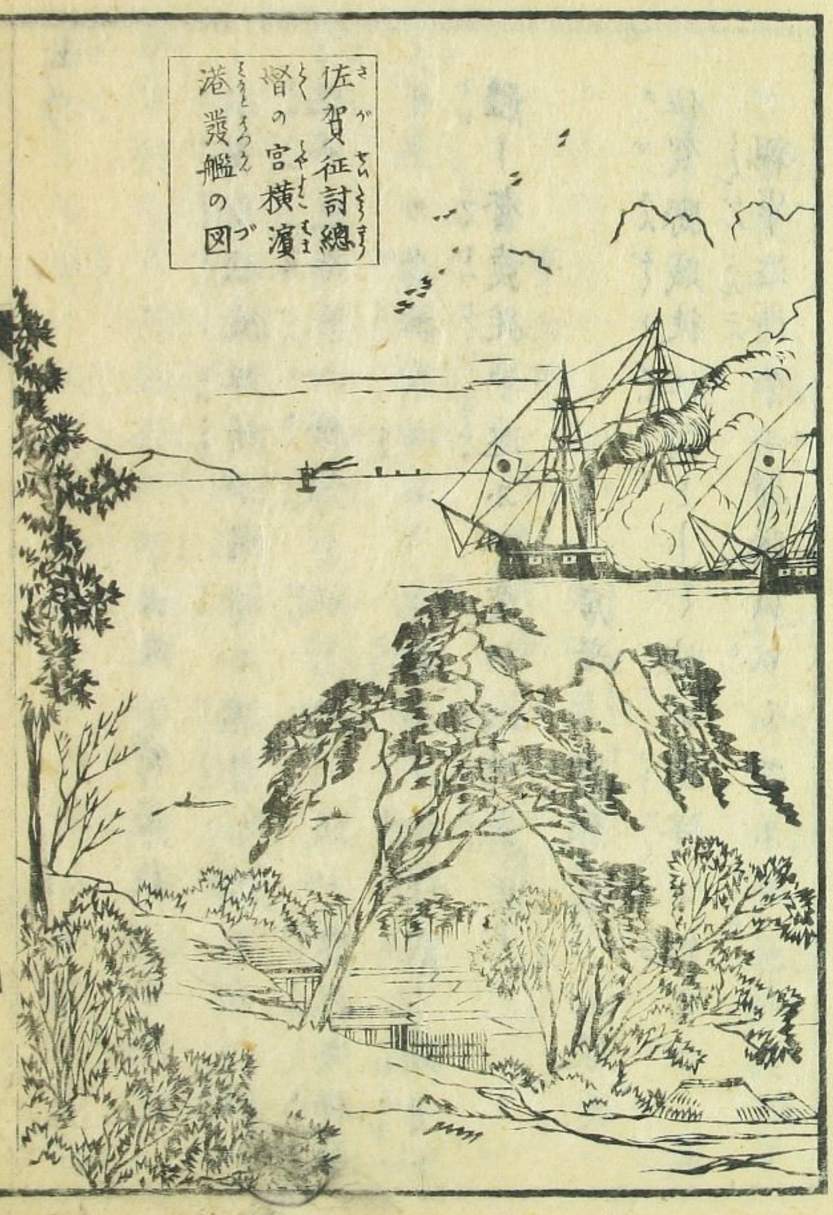
籌策成り疾くも此所を乘取り此とき城中より降旗を振り賊頭木原義四郎を總代とし尋て副嶋謙助ニ來り謹で降伏を請ふが故ニ諸軍ニ令して休戰を傳へ其處分城衆議するニ彼の歎願の書面不都合ニ文意ニ因て其儘差戻されたるニ休戰三日ニ經て二月ニ日ニ成ル三日江藤嶋の巨魁を始め其他の賊頭夜を侵して遁去せり且殘徒悉く城を開き軍門ニ降るを以て就縛を遂げ官軍直ちニ入城し脱賊の踪蹟所在嚴密ニ探索ありしバ這

面の戦争ニ福岡縣より出兵せし貫属隊の死傷を
都て三十九名にして其姓名を左に掲ぐ

戦死　幾嶋徳、樋口等　前田前　和田謹吾
矢柄至　箕原岩吉　濱地雷五郎　近藤政次
宮川影一郎　古部龍吉　病院にて死する者
岸本徒　手負　原寛一　船越政次郎　大畠太
七郎　帆足真穂　吉村増雄　濱井嘉三　吉村
林七　吉田勘次郎　荒井喜三郎　吉村九郎一
郎　林鐵之助　金澤良兵衛　梅澤盛太郎　岩
津安五郎　白水源十　高島習　松尾猪三郎
中倉敬太郎　山口友雄　谷口市郎　松本虎三
郎　長野次郎　松尾致　坂田静大郎　高取仁
平　青柳次郎　山下虎雄　野村田苗　以上
東京小八賊徒征討仰出され、總督として東伏見宮
嘉彰親王陸軍中将兼参軍山縣有明海軍少将伊藤
祐麿一等軍醫正石黒忠直等近衛兵二聯隊を引卒
し其他隨行の面々三月一日龍驤艦を解纜し佐賀
に向て出發し此際出張併せて居守聯隊へ勅語



佐賀征討總督の宮横濱港發艦の図



出張　聯隊長　大隊長

佐賀縣賊徒征討ヲ付特ヲ總督ヲ假セヲ　朕ガ
親軍近衛第二聯隊を以テ　朕ガ黎元を保護
セルの意極テ切なるを明ヲセ汝等能く期旨を
體シ奮發従事速ヲ平定の功奏せよ

居守　聯隊長　大隊長

佐賀縣賊徒征討トシテ特ヲ總督ヲ假セヲ　朕
親軍近衛第二聯隊以テ之ヲ趣シム仍テ

ハ輦轂の下守衛一層能く心を用ひ勉勵従事セ
ヨ

第六四　佐賀平定官軍入城の件　併賊徒降脱の二途城分ル

去る程ヲ佐賀縣全く平定ヲ仍テ内務卿を始め総
軍舉テ三月一日入城シ此旨電信を以て東京ヲ奏
シ各縣ヲ布達シテ賊蹟の探索を嚴密ヲシ諸軍の
勞を慰セル折柄岩村權令小倉より到着シ管下ヲ
布告シテ專ら人民を按撫セリ此時佐賀城中ヲ賊

の遺文ハ曰

當今の御政體ハ皇國内患外憂相起り迚も
相治り候場合ハ相成間敷憂國憂民の至り建言
建白少うらぞ同志相語らい會議ハ及候所一應
二應の御諭も無之突然鎮臺兵城中ハ御繰込相
成打拂の御手配ハ有不止得戦争ハ及候城中の
士決死罷在候處今般嶋津從二位卿鎮撫の命を
被為蒙早速和田中山鹿児嶋人ハて從二位公の命を帯ひ来る者あり両
人昨日大久保内務卿へ談相成候ハ有戦相止候

右ハ不止得儀と存罷在候得共奉觸朝廷の御
嫌疑候次第今更奉恐入候此段申上候

二月廿八日　副島謙助木原義四郎其外

外一通ハ其文ハ曰

數百年來天下忠義の士自然と嘯集　天皇の御
仁德とハ申ぞら又此輩の盡力ハて中興の
御大業ハ相成五方の人民目を拭て信賞必罰萬
機其所を得神世淳朴の風ハ復ー候ハんと希望
罷在候處豈圖らん恩賞必ぞ顛倒ー奸臣專ら横

ハり中興第一の元老島津從二位西卿正三位木戸從三位板垣正四位副島正四位後藤正四位其他有功の士を退け無功無頼の奸才を擧げ蠻夷の醜風ふ心醉ー開闢以來未曾有の寺政暴法重歛相行ハれ外國の黠奴を親む父兄師友の如く華士族及び人民を待せバ讐敵の如く四海荒蕪怨嗟の聲路ふ充つ然りと雖も海内憂國の士尊王愛國の念より三條大臣岩倉大臣へ建白鮮うゝむ両大臣忠諫の心頗るりと雖も才凡量

小ふ十て人を照せの明あく奸臣の為ふ愚弄を受け淺薄なる推謀詐術のミを施ー天下の人心ふ失却ー猥ふ殺伐の氣を起ー忠諫ある肥前を始め肥後より元勲の薩州を伐ち土州ふ及ばんとの結搆今般肥後鎮臺兵を發ー佐賀城ふ楠籠り全國の士族を擊ち掛る依之不得止全國忠勇の士ハ備置無識の士民ふ至るまで忠憤ふ堪へず本月十六日早曉より攻立昨十八日朝まで攻落ー暴兵打壞ひ申候先以て江藤正四位

其外と公平衆議の歸する所を以て適宜の處置
ふて四民安堵の樣取計ひ候ふ付き此上ハ内國
の大政を御改革被爲在外ハ不逞不禮の朝鮮國
を御征討被成候ハ勿論支那魯西亜の外こうと
も我ふ臣僕と走る御目途被爲在候ハぐハ不相
濟第一度々両大臣へ懇々忠告候通り中興の諸
元老を厚く御慰諭の上御登庸内ハ御仁澤を被
爲施外ハ御武威を被爲張封建郡縣並び行候ハ
でハ迚も神州治り候目的決く無之候此段諸官

御報奏奉願候也

明治七年第二月　従四位島義勇

評ふ曰前條遺文の如き元來激發の暴意ふ出て
其旨趣の蛇足ふ頑固の賊情を知るふ足れり
然れ共鴟の如き勤王の役寸功ふしとせず且其
舊主の忠奮ふ浴し無量の皇恩を以て高位を
侵し一度廟堂ふ併列し巍然國務ふ從事せしも
心裡舊弊と脱せず伎倆治安の材ふし故ふ開明
の方今黙陟其圖ふ叶ふ云免官束手ふるより微功

を賴み大ゝ不平の意を生じ事を朝鮮ゝ起し窮士を鼓舞し縷民を煽惑し以て其志を得んとするの不義非道其所為狂妄ゝあらざれバ愚の又甚しき者と云ハん歟此人往日秋田縣權令奉職の際彼の地出發の旅裝舊藩諸侯下國の如く有志者之を傍觀し密ゝ嘆息せしと云又義勇の性朋友知己ゝ對話する毎ゝ暴謾の癖疾あり常ゝ曰僕が論說若不適當ゝして事ゝ相違せバ其期首級を星せんなど誇言せり適せる哉這回の逆謀悉く齟齬し果して首級沈失ゝ到る豈奇ゝらずや

却說賊軍潰敗以後賊徒等悔後伏罪門を閉て謹慎する者凡二千人其中間々脫遁する者巨魁江藤新平其僕船田次郎及ひ且嶋義勇と始め石井竹之助山中一郎中嶋鼎藏香月桂五郎朝倉彈藏德久幸次郎山田平藏中村林太郎江口松之亟中橋藤一田中七四郎荒木幸四郎小川清武副嶋謙助重松基右衛門横山萬里櫛山弥助江口村吉中嶋又吉牛島朝實

松永宗助同権次生田源八等此他氏名未詳數名あり故ふ
内務卿直ふ四國九州其他城攝の間ふ令して賊徒
の踪蹟嚴重ふ探索あり是より前山口縣ハ九州接
近の地なるを以て賊徒等風ふ出入して大ひふ人心
を煽動せしめ爲ふ士民猜疑を抱き物議紛紜動も
すれハ沸騰の景狀あるふより内務卿より左ハ通
知布達あり
其縣の儀ハ九州接近ふ附萬一佐賀縣下賊徒潛
伏暴動も難測候條心得の爲別紙の通相達し候
事

第一條

人民の安寧を保全せしむる至仁の
叡慮を體
認し其旨を説示す可き事

第二條

佐賀縣逆徒ハ官軍を差向られ迅速征討し其根
を鋤去し再萌せざらしむるの朝旨なるを示
諭し管下士民の方向を定め聊疑惑なからしむ
る事

第三條

佐賀縣逆徒管下へ逃走潛伏も難測ふ附嚴密取締若逆徒と見認るふ於てハ猶豫なく遂捕縛其制し難きハ臨時の處分不苦候事

但巨魁前參議江藤新平踪跡の儀一層注意を加へ見當次第捕縛すべき事

第四條

不得止時機ふ至るとハ貫屬士民を擧げ邏卒を編制し臨時の處分允許せる事

偖ハ巨魁の一個嶋義勇ハ逸疾くも城を出て副嶋謙助重松基右衛門其餘八名の賊徒等と同行し谿間を潛り嶮岨を經て稍くふ乘船し辛くして鹿兒島縣ふ着せしうど當縣下ふも天網の洩るふけきバ爭う寄る邊の涯ふ便り藻魚の浮生を保んと滄浪々として三月七日の夜陰鹿兒嶋の城下ふ至る時捕吏の爲ふ見咎められ忽地逮縛せられたり此前日山田平藏生田源八牛嶋朝實松永權二郎の四名俱ふ捕縛ふ就きしクバ當縣權令大山綱良よ

り佐賀の内務卿へ報知あり因て此旨東京ゟ電信を以て通ぜられしゝバ則ち廟議ありて正院より賊魁管轄の府縣廳へ左の如く布達あり

東京府

其府貫属士族嶋義勇儀賊臣ゟ與ヘ遁逃候所於鹿兒嶋縣就捕縛候追て吟味の上至當の御處分可有之候得共先位記を被褫候條此旨相達候事

佐賀縣

其縣貫属士族江藤新平儀賊徒ゟ與ヘ遁逃候ゟ付捕縛の上至當の御處分可有之候得共先其位記を被褫候條此旨相達候事

明治七年三月

古語ゟ曰貪うして智短し馬疲れてハ毛長し如此ぞ如何然り老てハ當ゟ益壮んなるべく窮して益固うるべきを小人の閒居するや必ず不善を作す佐賀の士族等素餐の天禄ゟ飽き大義を唱へて非理を行ふ天網各身ゟ迫る此際虎口龍腮を辛く避け各地ゟ潛匿するゞ中ゟ巨魁江藤新

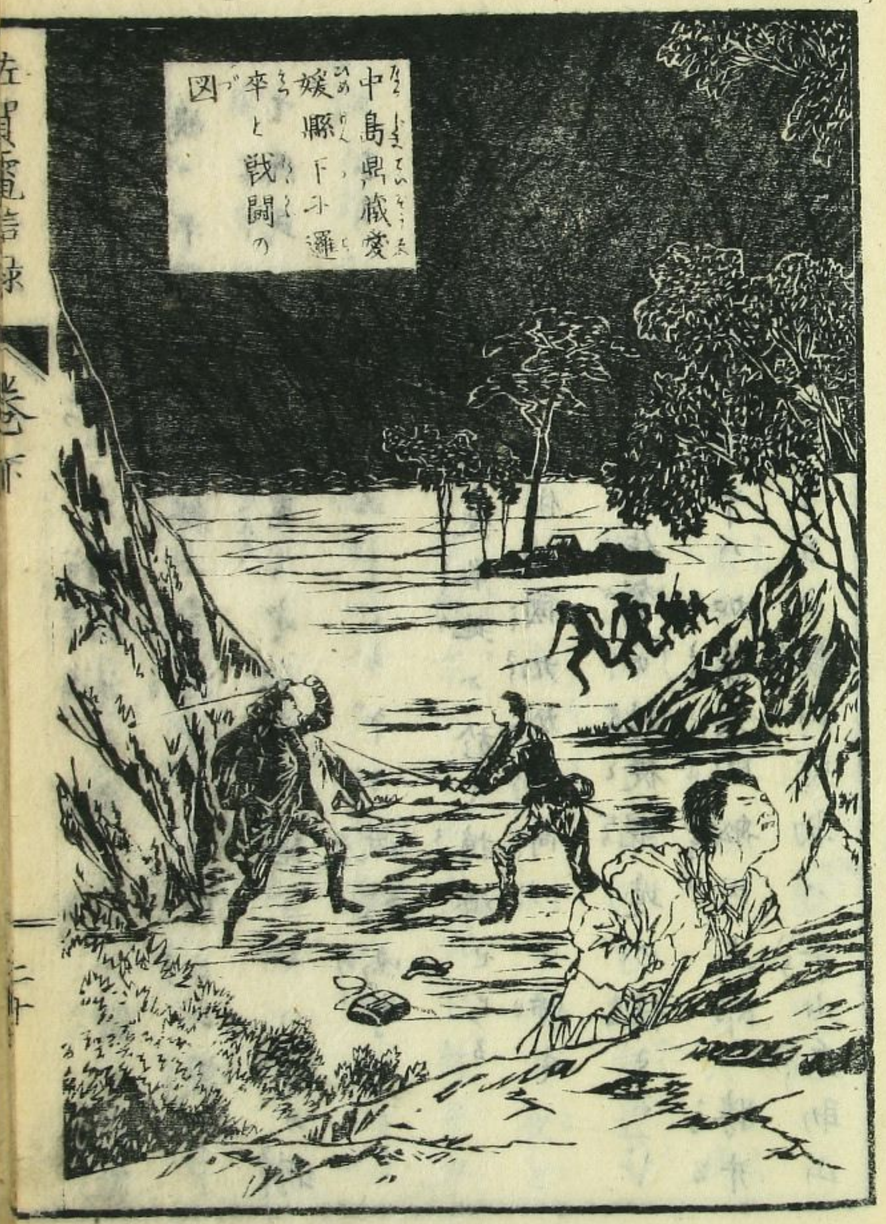
平ハ其従弟江口十作及ひ其僕船田次郎健ホ二人を従へ夜ホ乗じて遁せ―ホ途中香月桂五郎横山萬里中島又吉江口村吉の數名ホ邂逅せ―らハ此徒と共ヨ同行―海路鹿兒嶋ホ着せ―より一先此地の動静を探偵せんと逆旅ホ宿り其景況を窺ホ當縣既ホ内務卿の命令を体―賊徒の踪蹟厳重の探索なれバ今ハ此地ホも止り難く第三日を経―其夜の中ホ宮崎縣下戸の浦より四國を指て渡海ホ―稍くホ―て愛媛縣下宇和嶋ホ上陸せり然

ろホ當地も捕吏巡廻密ホ―て管内要衝の地ハ勿論船舶出入の場所分境等警備の出張ホつらざるハホ―殊ホ江藤ハ其寫真の影相を以て其容貌を看競ぶるの風聞なれで日下吾後影も捕吏の追迫せる歟と危懼―戦々栗々歩を促―晝ハ深嶺叢林ホ太陽を覆ひ夜ハ危險の山谷を経行―携へたる革籠行李ハ幽谿峻河ホ没投―飢てハ草根木皮を食ひ餓―てハ殘雪溪水を飲―一同の困迫比せる者ナ―其中江藤年長ホて今春初老を越ふるホぞ

他の青年等ハ氣力劣り殊ハ旧冬在京中ハ寸歩さ
うとも馬車ハ駕ー壯館ハ坐ー美室ハ卧ー玄冬三
伏の寒暑ハ觸れざあらぬ風ハも犯されざりーを
天魔悪鬼ハ魅せられん斯淺猿き落魄ハ但看る
屈原の放されて江潭ハ游び澤畔ハ行吟たるも斯
やうらんと思惟せらるーー顔色憔悴としーて形容枯槁
うう然れ共彼ハ世俗の塵埃ハ染まぞ三閭太夫の
名潔ようーて皎々の白うう此ハ滄浪の濁水ハ混
じて四位の記を汚せる暴動の魁うう噫我の渠ハ
恥る此一事反對の擧ゐる而已以て後昆の炯戒と
せるハ足る可ー

因て云江藤氏曩日司法卿在官中新律を立て舊
法を改正せるの際罪人遁逃の期ハ臨く人相書
を以て捜索を遂んこと頗る迂遠ハ属せバ爾後
懲役所刑の場ハ影相の寫室を設け一々罪人の
容貌を寫真繪ハ製せらるべーとの内命を下せ
ー事ありーとぞ然るハ今回の擧や其身大罪を
犯し脱遁せるより官其踪蹟を追ふハ江藤ガ遺

江藤主税峡
嶮を凌ぎて
高知縣へ逃
さる



中島鼎蔵愛
媛縣下へ逃
る卒と戰闘の
図

影の寫真を以て所謂汝が出て汝が歸る前條嶋が平常の誇言終に自適せると同日の談ふ〳〵て兩氏の未形ふ慮らず未兆ふ視ざるハ智の明うからざる性の正〳〵らざる故歟嗚呼

第七回　賊徒各地ふ於て捕縛せらる併西國九州方向一ふ歸る

窮士屢名を改むると佐賀の逆徒脫遁の後さまゝ〳〵ふ變名せり江藤新平ハ加藤太助船田次郎ハ勝井十三江口十作ハ安井五八櫛山弥助ハ平山兵助山中一郎ハ山本一助と假ふ稱〳〵各四國ふ遁逃せるゞ其中中島鼎藏横山萬里山中一郎の三名ハ一度鹿兒嶋縣下ふ赴き屈身潛伏せ〳〵らどを探索最も嚴かるふゞ此地を去りて高知縣ふ到らんと夜を犯〳〵他眼を避ゝて宮崎縣下ふ着せ〳〵ばを新平次郎桂五郎又吉村吉萬里の六名ふ出會せり（此時江口十作）の名を記せす惟ふらくハ江藤ふ隨行せ〳〵ふらんハ故ふ互ふ無事を祝〳〵是すゝ九人同船〳〵同月十五日愛媛縣下宇和嶋ふ上陸〳〵此ふ於て三名宛三組ふ分ゝ路次を異ふ〳〵各

土佐ゟ赴く程ゟ鼎藏弥助一郎ハ前の如くに同行し不知案内の嶮岨を凌ぎ矇々たる深林ゟ経て已が隨意枝路をたどる進むあるバ遅るゝあり故ゟ先途の一郎弥助ハ了ゟ鼎藏を看失ひ暫し株ゟ腰うちゝけ憩ひかゞゆゟ待てども来らぢ偖ハ中嶋吾輩と遥ゟ遅れ枝路を他方ゟとゝしゟらん止る地理を約せしゝらハ再會ゟ遅速あるのゝさるを安閑と待くらきバ樵夫獵師の目ゟ羅り怪まれんと必定せり疾々去らんと身話つい身を起して

歩を促ゟ去ゟ此ゟ此程絶て睦に附らぢ殊更宇和島より此地ゟ來るまで夜ゟ日ゟ継ぎ剰さへ一飯をも食せぎれバ飢餓迫り氣力撓みて今ハ歩行自由を得ぢ夜陰山林石崛ゟ露宿し稍くゟして二十二日高知縣下幡多郡橘川村まで来りし所當縣の捕吏斯と看咎め急地ゟ逮縛せり偖も中嶋鼎藏ハ弥助一郎を看失ひ獨行して此日愛媛縣下松丸町ゟさしかゝるゟ路傍ゟ停止一個の邏卒疾も之ゟ眼を配り笘笠ゟ面部を覆ひ鳶帔ゟ形容を纏ひし風体

如何も曲者と踪跡を踏み追蒐来たり其姓名を質問せしらば鼎藏驚怖の思ひを抱けど臆せる氣色を面貌ふ顯ぜず偽名を告げて去らんとせるふ邏卒行途ふ立塞がり不審の件々あるふより兎も角も警視出張所まで來る可しと強て拘引ふさんとせるふ鼎藏今ハ是まであり少し回答一言ふも及バずして驀地ふ馳出せを遁まじと彼邏卒疾風の如く追迫し帶たる一刀拔よりもやく擊て蒐るふ鼎藏も心得たりと拔合せ一上一下虚々實々一往一

來奮擊突戰斯る所ふ號笛の音ふ應じて漸々ふ走來る邏卒五六名鼎藏身体薄疵を負ひ戰ひ自由ふらざるらゝ應援數輩ふ爭ふ抗せん透を窺ひ闇夜ふ紛れ山路をさして遁逃せるふ幸ふしして追擊の人音も聞へざれハ茲ふ一息歩を止め滴る血汐をふ咽喉を濕らし手巾を裂きて疵瘍を覆ひ月の傾く方を目的ふ九折の嶮岨を凌ぎ曉天辛くして高知縣下ふ着せしとハ路傍の標示ふ知らせたり却説香月桂五郎中嶋又吉横山萬里の三個ハ前ふ同

徒と路次を異ふし高知縣ふ赴く途中愛媛縣管下吉野ふて是も邏卒ふ看咎めらき強て拘留せらる
る處深夜屯所の堺を踰へ一日夜兼程遁走し久禮浦
ふ到りしふ不圖鼎藏ふ邂逅せしうバ此所より同
船し浦戸を指して出帆せり高知縣廳斯と知りて
捕吏を八方ふ手分ふし其中山本檢部等も渠が踪
蹟を追逐し三月廿三日土佐郡種崎町ある逆旅家
森田友七郎方ふ着せるふ天ふる哉四名の逆徒も
亦茲ふ在り然而已ふらず山本檢部も茲ふ來れバ

四賊駭嘆天を仰ぎ捕吏の糾問ふ應じて速ふ其桂
五郎又吉萬里鼎藏ふることを陳白し且曰我輩此
期ふ臨み天命の歸るを覺れバ毛頭遁るゝ所存ハ
ちらふ卿縣廳ふ歎願の旨あらば明朝まで就縛
の猶豫あらん事を冀望せと真實しやうふ乞ひつ
つも時間を延し一名其坐を退きて兼て主個友七
郎ふ囑せし艤ひを促せ程ふ幾干もなく應援の捕
吏相踵で郡參し竟ふ四賊を捕縛せり去程ふ江藤
主僕ハ一度宇和嶋ふ着せを雖茲ふも足を止め難

く直ちに此所より乗船し三月廿四日といへるに浦戸より上陸ふし東方をきして奔走し同二十八日の黄昏甲浦に到りしに今宵の宿所を定めんと同地の番人浦正亂を欺きて副戸長濱谷清澄の家に案内させ其身岩倉卿密事探索の命を蒙り竊に主張せし者と詐り一泊を依頼するぞ清澄心中惟らく是かん前に寫真を以て布達ありし佐賀の巨魁江藤主僕に必定せりと微細を糺きむ崇敬し同所の逆旅に請待し此旨斯と出張所に忠告せ

り此期高知縣廳より當地に派出ふし居る細川少属併に捕吏川野鋏馬石本繁善其他番人北川信通岩崎義定の數名不時に馳付け同廿九日の拂曉該地の士族若干を募り置き新平主僕を戸長の家に聽し寄せ直ちに捕縛を遂たりき新平始めは氏名を偽り其實を吐露せざりしも終に自ら名乗りとぞ此間一封の書翰を出し竊に副戸長濱谷に託し之を郵便に附せんを乞ふ清澄陽に諾ひつゝ収て細川少属に呈しされば細川之を得て而後本

江藤主僕甲浦戸長の家ふ捕縛せらるゝ図

廳ハ逓送せり其封簡左の如し

東京ニテ
岩倉右大臣殿
急専用

請拝

斯て江藤主僕甲浦より高知縣廳まで護送せらるるの路次之を観る者群をなし或ハ譏り或ハ嘆ト嚷駡毀譽の各心ハ喋々囂々口善悪なく里聲の大耳ハ入らざるも江藤ハ獨り竹轎の透より虚空をうち望し

時を経つひに十月人ぐ絡こうま

斯口吟て過さりしとき時正ハ四月十三日完徒の處刑決定し佐賀縣ハ於て江藤嶋の両氏を始め其他十名死刑ハ處せらるる其餘軽重ハ仍除族懲役等の審判ありて九州全く鎮静ハ及びしかバ征討總督伏見の宮内務卿ハ先駈して龍驤艦を解纜あり て凱旋を奏し給へバ輦下を始め全國の民心安堵の思ひをあし續きて内務卿歸府ありしかバ衆

歓喜悦の眉をひらき御代萬歳を鼓腹ふ合ー各地
毎戸ふ首唱ーしるハ是ぞ皇統一系たる不易の國
威と知られたり

佐賀電信録下之巻了

○佐賀縣兇徒處刑告標併ふ辭世の詩歌

江藤新平　四十一年

嶋義勇　五十年

其方儀不憚朝憲名を征韓ふ托ー黨與を募り兵器を集め官軍ふ抗敵ー逆意ハ逞しる科ふ依て除族の上梟首申付ル

朝倉尚義　三十一年　香月桂五郎　二十五年　山中一郎　二十五年

西義質　中島鼎藏　二十七年

右征韓

副島義高　四十五年　重松基吉　五十一年　村山長榮　勇藏

福地常彰　中川義純

右憂國

其方儀不憚朝憲名を征韓憂國ニ托し江藤新平

嶋義勇の逆意を佐け官軍ニ抗敵せる科ニ依て

除族の上斬罪申付ル

はすゑをの流れを袖に志ぐれ

ゆくへもしらぬ人ぞ哀れ　江藤

武士の

はるかなるしの渕に雨もよ　同人

めはかすみ帆の揮を見そ孫

嶋の海に散さで死をとハ　西義質

村山勇藏

却爲逆賊上刑場　誰憐海内志士腸

莫道從容沉黙了　七生殘恨附勤王

山中一郎

苦學多年業未成　一朝謀敗死素輕

二十五年如一夢　誰使後人繼我誠

副嶋義高　何況七生出人間
死爲雷霆不可得　大義不動有如山
若使後人知我意

○佐賀縣戰爭に付官軍の死傷凡三百三十七人程其内死者九十九人賊徒の戰死凡二百五十名なる由又二月十五日十八日廿二日の戰ふて熊本鎮臺へ小倉縣元豐津より出兵せし内ふて戰死大池大尉澤田中尉溝部少尉其外十七名疵傷奥大尉其他六人程ありしと云且柳川の病院ふ入

る傷者四名福岡病院ふ入る傷者五十六名内賊徒一名役夫一名但し箱崎招魂場官軍戰死の墓三十二内福岡縣貫属九名ありと云

餘話追加

○佐賀出徒處刑の後該地ハ更ふ東京ふ寄寓せる父母妻子等憂苦欝悶の情ふ堪ざる者許多ある中彼の朝倉尚義彈藏の妻ハ同縣士族某の女ありて女甫めて三歳其夫征韓黨ふ與類し事敗ふて斬ふ處せ妻囚音を聞く號泣淚潸然たること數刻奮然

突起し其夫平常愛玩所の匕首を執り先其女兒を刺殺し又を交して自盡せりとぞ

○又曰同徒德久幸次郎の妻ハ東京濱町の市醫赤松元民の女なり嫁し來りて未一月なら𢌿家縣ホ著く該縣下征韓黨の起るホ際し其夫亦之ホ黨與し敗走して其踪蹟を知らず夫の兄之ホ再嫁を勸むるホ淨泣固辭し曰ふ俟て夫の存亡を知り而て後泰山の命を奉ずるも遲からざるありと因て國辭三章を賦し以て舅姑ホ贈呈す

花と咲き紅葉と散るる世のさまホ
きそそ𢌿松のこゝろ不ホ
すのれあしそのの日ぞのハ歸り來て
出でホ君よをとゞれもあり
ちゝ泣あゝバとこゝを捨て西の國へ
つゞさそう夢よ春のうりゞ

○

同縣紛擾の際長崎縣士族寺井氏の妻神妙の擧動をあせしを以て官之を賞せらるゝとと左の如し以て一美談とす

長崎縣管下第十一大區
竹松村居住士族
寺井亀太郎妻くゝ

其方儀先般佐賀縣騒擾ヨ付警備兵召募匆卒の際
丈亀太郎家事を抛ち一小刀を提げ會所へ馳付其儘編
隊廳下ヨ出張遂ヨ彼許ゟ進軍の趣聞傳へ一小刀を
以て戦地へ向候儀安心難致依て夫の太刀を携へ
獨歩彼許へ馳付候處既ヨ進軍の跡ヨ付夜陰を侵し
遠路跋渉終ヨ武口ヨ於て追付右太刀を夫へ渡し候
趣畢竟朝旨を遵奉し夫婦の情誼を盡し候段實
ヨ士族の婦たるヨ不恥神明の事ヨ付屹度譽置候事

佐賀縣故大屬小出光熙本年二月會賊徒
之暴動遂死非命岩村前権令慨惜之餘建
石碑于佐賀是権大屬卷某之所作云

小出光熙斗南之人也天資沈敎自能耐事曩者前
権令岩村通俊舉為大屬余復用之率入于縣焉今
茲明治七年二月十又五日兇徒如雲乗夜襲擊砲
聲飛霹靂城砦為震動當是時彼衆我寡其勢有朝
不可以謀夕者焉雖然衆皆勇鋭奮而不顧且戰且
拒延至三日米塩俱竭硝藥竭殫寧待其亡不如擊
之也是以昧爽衝圍蹂躪而過尉官交仆光熙亦死

實同月十有八日也既而六師奏凱亂黨爭降叅復入城四顧久之燹餘塵堆血痕風腥求其首級齎之于京而其股體埋之于此追懐且不已刻著其名于石焉年二十九嗚呼生任其責死見其節縱不自愛亦不慨惜也哉

明治七年五月上澣

佐賀縣権令正六位岩村高俊

大坂心齋橋渡辺久太郎　河内屋喜兵衛
同　南久寶寺町　伊丹屋善兵衛
東京日本橋通二町目　山城屋佐兵衛
同　浅草茅町二町目　須原屋伊八
同　本石町十軒店　椀屋喜兵衛
同　芝大神宮前　和泉屋市兵衛
同所　和泉屋吉兵衛版